

翻訳

## 天津の文化、及びその背景を知るための 基礎的研究 (2)

A Study note for understand The culture and its background of Tianjin(2)

後藤 岩奈\*

GOTO Iwana

### 1 はじめに

本稿は、国際地域研究学会編『国際地域研究論集』第2号(2011年)所収の拙稿「天津の文化、及びその背景を知るための基礎的研究(1)」(以下「天津(1)」と略記する)に引き続き、天津の文化、及びその背景となる歴史に関する基礎的研究のために、朱其華主編、劉永沢副主編『天津全書』(天津人民出版社、1991年。以下『全書』と略記する)より、天津の歴史について記述された箇所を、研究の資料として翻訳紹介するものである。

この『全書』は、『天津全書』編纂委員会によって天津紹介のために刊行されたもので、その「前言」では、「国内外の天津へのさらにいっそうの認識と理解の需要に応じるために、本書はできる限り全方位に、多面的に、立体的に天津の過去と現在を紹介する。(中略)本書は現在収集可能な各種資料と統計数字に基づいて、できる限り全面的に、正確に天津の全貌を紹介する」と述べている<sup>1</sup>。「総況」「政治」「社会生活」「城市建设」「経済」など23の章から成り、そのうち「総況」の中の「8、天津歴史簡述」「9、天津人民的革命闘争」「10、天津的解放」「11、天津解放後の重大事件」に天津の歴史に関する記述がある<sup>2</sup>。

本稿では、『全書』「総況」のうち、「8、天津歴史簡述」「9、天津人民的革命闘争」より、北洋軍閥の形成、義和団運動、愛国反米運動、辛亥革命を経て、1916年のフランスの老西開占領に反対する闘争までの時期に関する内容を翻訳紹介する。

次に、そもそもどうして「天津」を扱うのか、について述べてみる。「天

---

\* 新潟県立大学国際地域学部 (iwana@unii.ac.jp)

津（1）」の「1、はじめに」で述べた内容と重複するが、もともと、ごく私的な理由で、筆者は1990年9月から1993年7月まで、天津の南開大学に留学した経験があること、この三年間は、在華外国人としてではあるが、自分も天津の一構成要素であったという思いがあること、自分が今存在するこの土地、この街が、どのような経過を経て現在のような状態に至ったのか、自分が今、どのような流れの中に身を置いているのかを無性に知りたくなったこと、その流れを形成する諸要素を明らかにしたいと思ったこと、さらに筆者は中国近現代文学を専門としており、天津の歴史、社会、人々の生活から生まれた文学作品を鑑賞するためにも、歴史を知っておきたいと考えたことなどが理由である。

天津の通史、天津史の概説書としては以下のものがある。

- ・ 天津社会科学院歴史研究所『天津簡史』編写組編著『天津簡史』（天津人民出版社、1987年。以下『簡史』と略記する）
- ・ 天津地域史研究会編『天津史 再生する都市のトポロジー』（東方書店、1999年。以下『天津史』と略記する）
- ・ 吉澤誠一郎著『天津の近代 清末都市における政治文化と社会統合』（名古屋大学出版会、2002年。以下『天津の近代』と略記する）

筆者が敢えて『全書』の記述を訳出しようと考えた理由を述べる。一つには、1987年に出版された『簡史』は、記述が詳細で分量が多く、また『全書』の記述内容と照合して分かったことだが、『全書』の1949年新中国成立以前の内容は、『簡史』の内容を簡略したものである<sup>3</sup>。また『全書』は「事件史」の形となっており、天津史上どんな出来事があったのかを手取り早く知ることができる。しかしそのことは反面、ある事件と次の時期の事件とのつながり、歴史発展の因果関係、歴史的條件等が充分述べられていないとも言える。二つ目に、上記の三つの文献で扱われている内容は1949年の新中国成立、天津解放までが主であるが、『全書』の記述は1976年の「文化大革命」の終結までである。できるだけ同時代、現在につながる事実を知りたいと思っていたので、『全書』の記述を訳出することにした。

以下、2～3章において、それぞれ『全書』の該当箇所の翻訳を掲載し、「4、まとめ」において、上記の三つの文献を参照引用し、気づいた点を挙げてみる。なお原文には「注」は付されておらず、訳文中の〔〕による訳注、

および全章の文中の注は、いずれも筆者（後藤）が付したものである。

## 2 翻訳：「8、天津歴史簡述」より

『全書』「8、天津歴史簡述」より、北洋軍閥の起源とその形成過程、袁世凱らが行なった諸政策、すなわち巡警、地方自治、金融財政、実業、教育などの政策についての記述（『全書』22～23頁）を、以下に訳出する<sup>4</sup>。

### 北洋軍閥<sup>5</sup>

北洋軍閥は“小站練兵”を起源としている。同治九年（1870年）李鴻章が直隸総督に着任した後、淮軍を北に移動して駐屯させたが、当時の淮軍提督周盛伝の盛字軍は青島の馬廠に駐屯しており、新城砲台建設の責任を負い、馬廠から新城に至る交通の便宜のために、盛字軍は天津以南の窪地に一本の大きな道路を拓き、40里ごとに一つの大站を、10里ごとに一つの小站を設けたが、現在の“小站”、“大站”はここから名を取ったものである。光緒初年、盛字軍が天津の葛沽東南の小站一帯に来て駐屯開墾し、ここに築城し“新農鎮”と名を定めた。日清戦争が勃発し、盛字軍は命令により前線に赴いたが、全軍全滅した。光緒二十年（1894年）冬、清朝廷は長蘆塩運使胡燏芬に淮軍残部の整頓を命じ、小站で“定武軍”十營（計4750人）を組織し、ドイツ人ハンネッケン<sup>6</sup>に総教官を委任し、ドイツの訓練方法によって練兵を行なった。その後、この部分の軍隊は皇帝の命で“新建陸軍”の教練監督を行なう袁世凱が引き継いで統制した。袁世凱が引き継いだ後、一方で軍隊の増加募集を続け、一方で段祺瑞、馮国璋、王士珍、曹錕、盧永祥、王占元、段芝貴、李純ら天津武備学堂の卒業生を起用し、新たな営制〔兵営制度〕、餉章〔軍隊の給料の規則〕、操典を制定した。さらに小站到“新建陸軍督練処”及び歩兵隊、騎兵隊、砲兵隊などの隨營学堂と徳文学堂を建設したが、これがすなわち“小站練兵”の由来である。

戊戌変法の期間、袁世凱は光緒皇帝と維新派を裏切り、慈禧太后と直隸総督栄禄の信任を得て、“総統武衛右軍、工部侍郎”の名義を以て、小站で引き続き練兵を行なった。彼の新建陸軍もここから名を取っており、董福祥の“甘軍”と聶士成の“武毅軍”と並んで“北洋三軍”と称される。袁世凱軍閥集団は“北洋”の二文字を冠し始める。まもなく、清朝廷は北洋各軍を武衛軍に統合編成し、その下部は左、右、前、後、中の五軍に分かれ、すべて

榮祿が指揮することとなった。袁世凱の新建陸軍は“武衛右軍”に編成された。光緒二十五年（1899年）、袁世凱は山東巡撫<sup>7</sup>となり、武衛右軍を率いて山東へゆき、義和団運動を鎮圧した。もともと山東に駐屯していた旧軍三十四營は整理合併されて“武衛右軍先鋒隊”が編成され、また同時に若干の騎兵、歩兵の營の募集を行い、武衛右軍を拡大し、義和団運動の後、各路武衛軍はほとんどすべて瓦解したが、唯一武衛右軍だけが損なわれず、一兵一卒その勢いが盛んであった。

光緒二十七年（1901年）李鴻章が病死し、袁世凱はそれと同時に清朝に直隸總督兼北洋大臣に任命された。武衛右軍もこれに伴い小站に戻り、名称を“北洋常備軍”と変更し、左右兩鎮を設け、兩鎮とも12512人とした。光緒三十一年（1905年）清政府は練兵処を設け、慶親王奕劻を総理とし、袁世凱を会辦とし、鉄良を補佐とした<sup>8</sup>。袁世凱は腹心の徐世昌、馮国璋、段祺瑞らを練兵処に配置し、翌年袁氏は練兵処の名義を使って北洋常備軍を北洋六鎮に編成し、総計7万余人とし、第一鎮の1万余人を鉄良が統制する以外、その他はすべて袁世凱一味が統制するものであった。

袁世凱を首領とする北洋軍閥集団は、天津に20年あまり盤踞し、各方面からその統治を強化した。

### 巡警の設置<sup>9</sup>

光緒二十八年（1902年）天津都統衙門が廃止された後、袁世凱はすぐに直隸總督衙門を保定から天津に移した。帝国主義列強が天津に中国軍隊の駐屯を許さないという状況に直面して、袁世凱は“治安維持”を名目として、保定で巡警3000名を募集し、新練軍兩營を巡警に改編し、金鋼橋の北に巡警局を設置し、巡警部隊を金鋼橋以北の一带に駐屯させた。のちにさらに東門外の海河寄りの場所に巡警総局を設置し、候補道の趙秉鈞が総裁に就任し、巡警1500名を派遣して金鋼橋以南一带に駐屯させた。同時に“天津警務学堂”を設立した。光緒三十一年（1905年）には天津四郷巡警が設置された。實際上、これは清王朝が各地に警察制度を建設する端緒となった。

### 地方自治の試行<sup>10</sup>

光緒三十一年（1905年）まさに清政府が立憲君主制推進の準備をしていた時、袁世凱は天津に自治局と自治研究所を設置した。光緒三十三年（1907年）天津市で初めて投票選挙が行なわれ、議員30人が選出され、天津県議事

会が組織された。このようなやり方は、当時の人々に“官営自治”とからかわれたが、政治力量の拡大においては有利なものであった。

### 金融財政の支配<sup>11</sup>

袁世凱は光緒二十九年（1903年）盛宣懷の手中から輪船招商局と電報総局の権力を奪い取った後、天津で“印紙税”を始め、直隸省公債を発行し、督銷塩局を設立し、長蘆塩の販売を支配した。彼はさらに貨幣の整頓から着手し、光緒二十八年（1902年）もともと保定にあった直隸省官銀号を天津に移転して、天津城の東北角に開業し、銀両と銀元の二種類の額面の紙幣を発行した。同時に候補道周学熙に命じて北洋銅元局を兼務させた。周学熙の経営才幹によって、前後してわずか72日で銅元を鑄造し、その後さらに加えて銀元も鑄造し、毎年70万から80万両の利益を得た。清朝廷は貨幣鑄造の成果が顕著であるのを見て、光緒二十九年（1903年）にも天津に“鑄造銀錢総局”を設立し、軍機大臣徐世昌がつねにその仕事を管理し、翌年“戸部造幣総廠”に改名し、龍洋、銀の補助貨幣および銅元の鑄造を始め、その結果、袁世凱の北洋財政に大きな利益をもたらした。

### 実業を興す<sup>12</sup>

光緒二十九年（1903年）、袁世凱は周学熙を実業視察のため日本に派遣した。周学熙の帰国後、袁世凱は、日本に学び、まず学校、工場を興さなくてはならないとする周学熙の意見を取り入れ、周学熙を直隸工芸局の総裁に委任し、天津の実業建設を受け持たせた。直隸工芸総局は光緒二十九年八月（1903年9月）に創設され、初めは東南城角の草廠庵の“工芸学堂”内に設けられたが、光緒三十三年（1907年）になり玉皇閣に移転した。工芸総局の下には“工芸学堂”、“実習工廠”と“考工廠”が設けられた。直接に実業建設に従事するため、直隸工芸総局はさらに官銀号から銀20万両を借り、光緒三十一年（1905年）“北洋官造紙廠”を開設し、翌年には“北洋勸業鉄工廠”を開設した。直隸工芸総局の唱導の下、天津に一群の“官助商弁”の近代企業が現れた。例えば、天津織染縫紉公司〔織染物、裁縫会社〕、天津造脍公司〔石鹼会社〕、華芸碑酒公司〔ビール会社〕、海北（製塩）公司、万益織呢廠〔ラシャ織物工場〕、および牙粉廠〔齒磨き粉工場〕、玻璃廠〔ガラス工場〕などである。光緒三十三年（1907年）周学熙はさらに袁世凱の支持の下、“啓新洋灰公司”〔セメント会社〕と“灤州煤鉄有限公司”〔炭鉄

会社」を開設した。この二つの会社は“商弁”を名乗っていたが、実際には周学熙が北洋軍閥の財力と政治の後ろ盾を頼りに経営発展したものであった。その他の北洋実業と同様に、いずれも北洋軍閥の統治のための経済的基礎を固めた。

### 市政建設を行なう<sup>13</sup>

天津は比較的良好な地勢であったため、すでに各国租界によってすっかり分割され、旧城内も発展の余地がなく、そのため袁世凱は比較的辺鄙な河北地区の経営を決定した。当時、直隸総督衙門が河北区金鋼花園付近に設けられており、交通の便宜のために、袁世凱は金鋼橋口から北に向かって京津鉄道線まで、一本の直線の道路を開くことを決定し、大経路（現在の中山路）と命名し、並びに天津北駅を建設した。同時に大経路の西側に順番に二、三、四経路などを大経路と平行して開き、さらに南から北に向かって順番に天、地、元、黄など経路に垂直に交差する緯路を開き、その後、これらの場所に相次いで官庁、学校を建設した。余った場所はすべて天津県が借り受け、民家を建設した。

### 教育を興す<sup>14</sup>

光緒三十一年（1905年）から、相次いで天津初級師範学堂、北洋師範学堂、天津府官立中学、北洋女子師範学堂、高等女学堂、直隸高等工藝学堂、北洋軍医学堂、北洋巡警学堂、法政専門学堂などの官営学校が創設され、これは天津の近代教育事業の発展に一定の促進作用を持った。

### 租界の庇護<sup>15</sup>

早くも都統衙門が廃止された頃、袁世凱はすでに帝国主義列強と付き合いがあった。そして帝国主義は中国政局を支配するため、各租界と領事館も往々にして中国各派の下野軍閥や失意の政客が政治軍事の陰謀を行なう場所となった。袁世凱を首領とする北洋軍閥についても例外ではなかった。光緒三十四年（1908年）、光緒帝と慈禧太后が相次いで死去した。三歳の溥儀が皇位を継承し、その父載灃が監国攝政王に任じ、袁世凱の権勢を阻止するため、袁が“足の病氣”を患っていることを理由として、彼を療養のため河南の実家に戻らせた。宣統三年（1911年）武昌蜂起が勃発した後、革命の狂瀾を防ぐため、またも袁世凱を内閣総理大臣に就任させた。この時、袁世凱は

革命に反対しただけでなく、同時に清帝に退位を迫った。その後、清朝が崩壊すると、袁世凱は中華民国の中央政權を盗み取り、北京に都を定めた。彼はただちに腹心の馮国璋を直隸都督と省長に任命し、北洋直系の軍隊を率いて天津に駐屯した。1916年6月、袁世凱は帝政復辟に失敗したため、羞憤の中死去した。しかし北洋軍閥集団は依然としてその統治を維持し、中国の政局は依然として小站出身の一群の軍閥の手中に支配されていた。これらの人物は下野するごとに、ただちに天津に逃げ戻り、外国租界を頼りに身を隠し、時機が熟すのを待って再起し、依然として北京で権力を掌握した。例えば1917年5月、段祺瑞は黎元洪によって國務院総理兼陸軍総長の職務を解かれてから後、日本租界で秘密裏に活動し、各省の軍閥に指図して“独立”を宣告させ、中央を離脱し、天津で“独立各省総参謀部”を組織し、武力で黎元洪を打倒することを表明した。張勳は黎段調停を名目として、辮子軍を伴って北上した。張勳は天津を通過する時、前後して段祺瑞と徐世昌の家で活動を行い、その後、北京に入り馮国璋、陸榮廷らと共に、廢帝溥儀を擁して復辟し、天津に人を派遣して段祺瑞に連絡した。復辟が人心を得なかったため、各省は電報で非難した。段祺瑞は日本政府の支持を得て、7月3日天津に“討逆軍総司令部”を設立し、自ら総司令に任じ、曹錕、段芝貴はそれぞれ東西両路の討逆軍総司令に任じた。7月5日、段祺瑞は馬廠に赴いて誓いを立て、討逆軍の主力は12日に北京に迫り、張勳はオランダ公使館に逃げ、復辟の茶番劇は終わりを告げた。7月6日、副總統馮国璋は大總統代理の職に就くことを宣告し、段祺瑞は天津に國務院弁公室を設け、同時に内閣構成員名簿を立案した。14日、段祺瑞は入京し、黎元洪は離職の知らせを通達した。15日、段祺瑞は組閣し、自ら國務院総理兼陸軍総長を任じた。8月1日、馮国璋が總統に就任した。要するに、外国租界の庇護があったために、長期間に渡り、天津は北洋軍閥集団が陰謀詭計を画策する場所であった、そのため当時“北京は表舞台、天津は楽屋裏”という言い方があった。このような状況は、1927年に蒋介石が新軍閥統治を打ち立てて、ようやく一段落を告げるようになった。

### 3 翻訳：「9、天津人民の革命闘争」より

「9、天津人民の革命闘争」より、北洋軍閥袁世凱らの政策が実施されていた頃と時期的に重なる義和団運動、愛国反米運動、辛亥革命、フランスの

老西開占領に反対する闘争について述べられた箇所（『全書』26～30頁）を以下に訳出する。

### 義和団運動<sup>16</sup>

光緒二十六年（1900年）、義和団の反帝愛国運動が勃発し、天津は義和団が帝国主義侵略に武装抵抗する主要な戦場となった。

義和団は山東省に起こり、その後直隸（現在の河北省）にまで発展した。天津城では1900年の春に義和団の公然活動が始まった。義和団に参加したのは農民、船頭、手工業者、産業労働者と一部の清軍兵士であった。青年婦女も封建礼教の束縛を打ち破り、“紅灯照”を組織した。五月（6月）の間、天津付近各県の義和団が続々と天津城に入り、団員総数は4万余人に達した。義和団は天津のいたるところに壇口を設け、総壇口は呂祖堂に設けられた。天津義和団は行動を開始するや、ただちに“外国人を殺し、外国宗教を滅ぼす”のスローガンを掲げた。彼らは張徳成、劉呈祥（劉十九）、曹福田、林黒児（女。義和団は“黄蓮聖母”として尊敬した）らの指導のもと、あっという間に天津城を支配下に置いた。五月十九日（6月15日）、義和団は再び望海楼教会を焼き討ちした。五月二十日（6月20日）、義和団は天津県監獄になだれ込み、捕われていた団員を救出した。彼らはさらに直隸総督衙門から武器を取り出し、自らを武装した。五月二十五日（6月21日）清政府は対外宣戦し、義和団に対しては、これまでの禁止討伐から宣撫に改めた。これ以後、清朝の役人は天津で義和団の隊列に出会った時、文官は必ず駕籠から降り、武官は必ず馬から降り、脱帽起立するようになった。

義和団は天津、北京一帯で迅速に発展し、このため清朝は情勢を制御する能力を失い、このとき帝国主義は共同出兵して義和団を鎮圧することを決定した。光緒二十六年四月（1900年5月）、北京駐在の各国公使は会議を行い、天津租界駐在の各国連合軍を北京に移動させることを決定した。同時に、大沽口に駐屯している軍艦の各国侵略軍も、“鉄道の保全並びに天津の外国居留民の保護”を名目として、大沽砲台に向けて攻撃をしかけた。天津義和団は外敵の侵入に反抗し、天津城を防衛するため、英雄的で頑強な戦闘をおこなった。

第一、シーモア連合軍への反撃。五月十四日（6月10日）、イギリスのシーモア<sup>17</sup>が率いる英、独、露、仏、米、日、伊、オーストリアの8カ国2064人で組織された侵略軍は、天津から列車に乗って北京を侵犯しようとした。天津



義和団はこの知らせを聞くと、すぐに鉄道沿線の団員と村人を組織して線路を覆し、駅舎を焼き、橋を解体して、次々と阻止行動をおこなった。十六日（6月12日）、列車は二日の時間をかけて、なんとか廊坊に至ったが、またも義和団の痛撃を受け、300人余りが死傷した。シーモアは“北京に進む路は、水陸ともに尽きる”状況のもと、天津に引き返すよりほかなかった。侵略軍は天津に引き返す過程で、途中で義和団の攻撃に遭った。廊坊から天津に至る行程で、合わせて半月の時間をかけて、五月三十日（6月26日）にようやく天津租界に逃げ帰った。義和団のシーモア連合軍への反撃の勝利は、帝国主義が共同で北京に進軍しようとする企てを粉碎し、この失敗により、彼らは“欧米人が欧米人の目前で面目を失う”のを認めざるを得なかった。

第二、老龍頭駅攻撃の戦闘。老龍東駅（今日の天津東駅）は、北京、塘沽へと通じる中枢で、天津の北側から租界に入る入り口でもあり、1700人のロシア軍が駐屯していた。五月二十二日（6月18日）より、義和団首領の曹福田は団員および一部淮軍、練軍と武衛軍を率いて、力を尽くして駅を攻撃し、前後してロシア軍500余名を死傷させた。ロシア軍は持ちこたえることができず、一方で白旗を掲げて講和を求めるふりをし、一方で租界に兵を運んだ。その後、曹福田、張徳成は義和団を率い、連合して老龍頭駅に進攻し、練軍の大砲の援護のもと、一度は鉄道駅を攻め落とした。租界から派遣された増援の侵略軍は、駅に接近することができず、恐々として租界に戻るしかなかった。義和団の老龍頭駅攻撃の戦闘は、天津城の陥落まで続いた。

第三、義和団は老龍頭駅を攻撃すると同時に、租界包囲攻撃の戦闘を行なった。五月十八日（6月14日）から六月十八日（7月14日）まで、義和団はまるまる一ヶ月租界を包囲した。彼らは大砲を城壁の上に備え付け、租界を砲撃した。イギリス、フランス租界の多くの建築物が破壊された。ロシア領事館、イギリス工部局（ゴードン堂）は砲撃にあった。イタリアとイギリスの司令官は重傷を負った。六月九日（7月5日）、張徳成、曹福田と清軍将校の聶士成、馬玉昆らは租界攻撃を画策し、曹福田、馬玉昆が老龍頭駅方向から租界に進攻することを決定した。張徳成と聶士成はそれぞれ租界の西南と南方から攻撃し、“以て三面環攻の計とした”。当時、連合軍は租界内にバリケードを施し、地雷を埋めていた。張徳成は“火牛陣”を使用して一挙に地雷を取り除き、その後租界に対して猛攻撃し、租界の洋館多数を焼き払い、空が明るくなるころ、義和団は勝利して兵を収めた。六月十日（7月6日）、聶士成は軍を率いて租界西南部に攻め入った。翌日、さらに小営門一帯を占

領し、大口径のクルップ砲二門を備え付け、紫竹林租界に向けて猛攻撃を加え、フランス租界に大きな脅威を与えた。

第四、義和団と清軍が租界の包囲攻撃に力を入れると同時に、各国連合軍も陸続と大沽口から上陸し、天津租界に攻め入った。連合軍は義和団と清軍の租界に対する砲火による脅威を軽減するために、一部隊を派遣して天津西南に移動させ、聶士成の退路を包囲攻撃した。一群の日本軍がまず南郊の紀庄子を占領し、そして南門に通じる交通の要路を制圧した。別の連合軍約6000余人は小営門と馬場道一帯の聶軍に進攻し、聶軍を八里台一帯まで後退させた。このとき日本軍騎馬隊が馬庄子から攻めて来て、聶軍は包囲された。当時、形勢は大いに危険で、聶軍営官の宋占標は泣いて聶士成に撤退を求めたが、聶はこれを許さなかった。激戦の中、聶士成は四回馬を乗り替え、全身7箇所に被弾し、その後“腹が破れて腸が出て”、“一つの弾が口から入って後頭部を貫通し、さらに一弾がこめかみを貫通したが、なおも耐えて奮戦し、最後の一弾が胸を傷つけ、ようやく倒れた”。聶士成が犠牲となった地点は、現在の八里台南の聶公橋付近で、橋の傍らに聶公碑が立っている。

第五、天津城防衛の戦闘。帝国主義の不断の増兵と連合軍の侵略の気炎で、清朝はすぐに義和団に対する宣撫政策の変更を迫られた。天津では、清朝はまず投降派の宋慶を北洋大臣の補佐に起用し、続いてさらに六月十二日（7月8日）、李鴻章を直隸総督兼北洋大臣に任命した。宋慶は来津後、義和団を主要な敵と見なした。彼は義和団を租界攻撃の“先鋒”とし、背後で清軍が作戦を監督し、“進攻の力無き”者は直ちに銃殺した。わずか六月十三日（7月9日）の一晩だけで、義和団民の被害者は2000人余りに達した。六月十七日（7月13日）、宋慶は“拳匪徹底殺害”の命令を下し、義和団の壇口をすべて破壊した。その日、連合軍はロシア海軍司令アレクセイエフ<sup>18</sup>が天津城攻撃を指揮した。日本兵は南門を攻め、ドイツ兵は東門を攻め、ロシア兵は老龍頭駅から三岔口水師営と直隸総督衙門に迫った。義和団は宋慶の虐殺に遭い、隊列は次々に撤退した。宋慶、馬玉昆は形勢不利と見ると、ただちに楊村へと逃げた。天津城を堅守するのは張徳成、楊寿臣が率いる義和団民および練軍、水師営、蘆勇、雁戸など、計一万余人だけであった。連合軍は何度も天津城を攻撃したが、いずれも撃退させられた。六月十八日（7月14日）、明け方の5時、数人の日本兵が義和団民を装って騙して南門を開け、その後爆薬で城壁の一部を爆破して穴を開けると、連合軍は勢いに乗じて進入した。張徳成、楊寿臣が率いる義和団と侵略者は市街戦を展開し、二日後、とうとう天

津城を撤退した。連合軍は天津城を攻撃する際、合計700余人が死傷した。義和団の天津城防衛の戦闘は、敵を最も多く殺害した戦闘であった。

義和団運動は失敗したが、しかしそれは帝国主義に屈服しない中国人民の頑強な反抗精神を十分に体现し、中国を分割しようとする帝国主義の陰謀に力強く打撃を与え、清王朝の反動統治を弱め、同時に人民大衆の愛国主義の覚醒を高めた。

### 1905年天津の愛国反米運動<sup>19</sup>

1840年のアヘン戦争後、多くの中国人労働者が騙されてアメリカ西部へ行き、資本家のために過酷な労働をさせられた。同治十年（1871年）、アメリカ国内で経済危機が勃発し、アメリカの統治者は国内の人民闘争の注意をそらすために、中国人排斥活動を始めた。このような中国人排斥活動はますます熾烈になり、その後、武装による華僑討伐にまで発展した。アメリカ統治者のこのような華僑迫害の罪行に抗議するために、光緒三十一年（1905年）、全国各地ですさまじい勢いの反米愛国運動が巻き起こった。

光緒三十一年五月（1905年6月）、上海商務総会は会議を行い、アメリカ製品のボイコットを決定し、並びに天津、漢口、広州など21箇所の商務局に電報を発信し、各地の商店もお互いにアメリカ製品を売買しないよう呼びかけた。ニュースが天津に伝わると、まず商業界と愛国学生の賛同を得た。

五月十六日（6月18日）、天津商務総会は絹織物、外国製品、雑貨、製粉など各商店の理事200余人を招集して会議を行い、アメリカ製品ボイコットの事案を協議した。参加者は今後二度とアメリカ製品を購入しないことに一致して同意し、さらに“罰則規定”を議定し、もしも違反者がいたら罰金500元とした。同日、天津官立中学堂、私立敬業学堂も天津の30近くの学堂代表600余人を招いて集会を行ない、アメリカの中国人労働者迫害という罪行に抗議した。大会は一致して外国製品ボイコットの方法10条を採択し、その中には“凡そ我々は今日から一律にアメリカ製品を買わない”、“凡そ我々は一律にアメリカ製品の不買を家庭と親友に奨励し、アメリカ製品不買の主旨を明らかにすべきである”、“アメリカ人と出会ったら、いつも通りにこれに接し、これを困らせてはならず、我々はこれを以て学界以外の人を諭すべきである”、“中国の工場でアメリカ製品ボイコットの資金が足りている者は、調査して振興すべきである”、“各学堂は1～2名を推薦して、場所を決めて演説し、大衆にアメリカ製品の不買を周知させる“などが含まれている。集

会後、各校の学生は袁世凱の厳令を顧みず、“方法”の規定に基づいて行動を始めた。愛国学生の影響の下で、鉄道駅および埠頭の労働者はアメリカ製品の運搬を拒絶し、市民はアメリカ製品の購買を拒絶した。天津租界内のアメリカ商店では商品に手をつける人もなく、天津港から輸入されるアメリカ製品も明らかに減少した。

袁世凱は天津人民の反米愛国運動を大いに恐れた。運動が始まると、彼は五月十九日（6月21日）厳禁を命じた。アメリカ公使ロックヒル<sup>20</sup>もまた袁世凱を通して清朝廷に圧力を加え、七月二十一日（8月21日）清朝廷に全国範囲の反米愛国運動の禁止と鎮圧の詔書を發布させた。同時に各省に“無知の徒が中に立って扇動誘惑し、紛糾を引き起こすようであれば、ただちに厳重に追究し、以てこの災いを防ぐ”と厳しく命じた。袁世凱は朝廷の“詔書”を手にして、まず天津と中国北方の反米愛国運動を鎮圧した。彼は命令を下し、天津『大公報』に対して“禁閱”、“禁郵”を実行し、七月十七日（8月17日）『大公報』を停刊に追い込んだ。

天津の反米愛国運動は嵐のように展開され、アメリカ帝国主義に有力な打撃を与えた。しかしその後、ブルジョアジーの動揺のために、特にまず天津商会が約束を破棄し、五月十九日（6月21日）袁世凱が禁令を發布した当日、各商店に“すべての貿易を正常に”、“絶対にデマに惑わされてはならない”と通知し、このため大衆を指導して闘争をやり抜くことができなかった。

### 天津の辛亥革命<sup>21</sup>

辛亥革命以前、天津地区の革命勢力は活動が活発であった。光緒三十二年（1906年）、孫中山は同盟会総部外務部幹事廖仲愷を日本から天津に派遣し、同盟会天津地方組織を建設して革命活動を指導させた。

宣統三年八月十九日（1911年10月10日）、武昌蜂起の勃発後、天津人民の革命闘争精神は大いに奮い立ち、さまざまな革命団体が続々と成立した。この時期、天津共和会会員が発動した辛亥灤州蜂起と鄂軍代表辦事処の指導する辛亥天津蜂起の影響が最も大きかった。

天津共和会の発起人は張相文と白雅雨（毓昆）で、二人は個別に北洋高等女子学堂、北洋女子師範学堂、北洋法政専門学堂の教師となった。宣統元年八月十五日（1909年9月28日）、張相文の発起で、中国で最初の近代地理学研究的の学術団体“中国地学会”が成立し、さらに翌年一月『地学雑誌』を創刊し、これを基地連絡同志とした。武昌蜂起の勃発後、張と白の二人は“密か

に団体を結成して行動の機会を待っていた”。宣統三年九月二十日（1911年11月10日）白雅雨の発起で天津紅十字会が成立し、革命の外郭組織とした。まもなく、さらに偽フランス租界梨棧の生昌酒楼で天津共和会（北方共和会とも言う）が成立し、白雅雨が会長となった。共和会は成立後、北京や天津地区で積極的に革命活動を展開した。共和会の重大な行動は、灤州駐在清軍第二十鎮蜂起の発動であった。白雅雨、孫諫声ら革命人は灤州に到着した後、積極的に営長王金銘への工作を行い、あつという間に灤州は“大通り路地裏、至る所に蜂起への投降の告示が貼り巡らされる”こととなった。清朝廷はこの知らせを聞いた後、恐れおののき、慌てて通永鎮守使王懷慶を灤州へ討伐に派遣した。宣統三年十一月十三日（1912年1月1日）、つまり王懷慶が灤州に到着したその晩、王金銘は蜂起の電報を発信した。十五日（1月3日）“北方軍政府”が灤州で正式に成立し、王金銘が大都督、施從雲が総司令、孫諫声が軍務部長、白雅雨が参謀長となり、同時に中国駐在の各国公使に通告した。十六日（1月4日）午後、北方軍政府は出陣大会を挙行し、その晩すぐに天津へと進軍した。彼らは進軍の途中、王懷慶軍の阻止に遭った。その後、王懷慶は阻止が勝利できないと見ると、停戦を装って、王金銘、施從雲、孫諫声を陣前で捕らえ殺害するに至った。白雅雨はその身一つで古冶まで逃げたが、また清軍に捕われの身となった。拷問された時、白は王懷慶に対して“私は革命のために、当然国のために死ぬ。今捕らえられているのは、言うまでもない”と言った。刑が執行される時、白雅雨は立って跪くことはなく、“この身が裂かれようとも、この膝は屈しない！”と言った。その後彼は死刑執行人の手で残酷に殺害され、灤州蜂起の失敗が告げられた。この悪い知らせは天津まで伝わり、北洋法政専門学堂の学生は、特に白雅雨先生のために追悼会を挙行し、李大釗も大会に出席した。

李大釗は、1907年から1913年まで天津の北洋法政専門学堂で学んでいた。在学期間中、彼は清末の国会請願運動に参加したことがあり、ブルジョア階級革命派の闘争に同情、支持していた。

武昌蜂起の時、かつて北方で革命活動を指導していた胡鄂公はちょうど漢口にいたが、その後軍政府は胡を天津、北京一帯に派遣して革命活動を組織させた。宣統三年十月十二日（12月2日）、胡鄂公は天津北洋医学堂において湖北軍政府代表の名義で北京、天津、保定、灤州、通化、石家荘一帯の革命団体の責任者を招集して会議を開き、天津に鄂軍代表辦事処を設立し、各地に総指揮処と総司令部を設ける議決をした。天津総部は早くも十月十日（11

月30日）に成立し、孫諫声が総司令に着任した。

天津の各革命団体の行動を統一するために、胡鄂公の発起で、十月二十四日（12月14日）イギリス租界の小白楼で、同盟会、鉄血会、振武社、急進会、光復会、北方革命総団、共和革命党、女子北伐隊、天津共和会、女子革命同盟などの団体の代表を招集して会議が開かれた。協議の結果、“北方革命協会”が結成され、胡鄂公が会長に推挙された。この後、胡は南京へ行き孫中山と会見した。孫は胡に“北方の革命運動は、目前の一切を固く重視せよ”と表明し、さらに胡に革命活動費20万元を与えた。胡鄂公は孫中山の指示を得た後、ただちに天津に戻り、十二月九日（1912年1月27日）、フランス租界で各革命団体の代表会議を招集した。会議では、胡鄂公は孫中山の指示を伝え、天津における武装蜂起発動の問題について議論した。会議は“北方革命軍総司令部”の成立を決定し、胡が総司令に就任した。会議ではさらに蜂起の計画について議論し、最終的に十二月十一日（1912年1月29日）夜12時に蜂起を開始することを決定した。武装蜂起の開始後、直隸総督衙門、巡警道衙門、電報局、電話局および重要道路橋梁を攻撃占領し、直隸総督衙門を占領した後、ただちに“津軍都督府”を成立させる、というものであった。

蜂起の計画によると、蜂起発動の信号砲は、中国革命に同情する日本人谷村と彼の通訳王一民によって点火されることになっていた。十一日（1月29日）夜、谷村は酒を飲んだ後、直隸総督衙門付近の一軒の材木屋に潜伏していたが、夜の10時になり、隣接の時計が誤って12回鳴ったため、谷村は慌てて自分の夜光時計の長針短針を見間違え、その結果2時間早く信号に点火した。また点火の際の不注意によって谷村はその場で爆死した。各路蜂起軍は信号を聞いた後、準備がまだ整っておらず、慌てて時間を繰り上げて行動せざるを得なかった。直隸総督衙門を攻撃する120名あまりの隊列は守備軍の抵抗に遭い、最後に援軍にきた清軍に包囲され、多勢に対抗できず、失敗した。

十二月二十二日（1912年2月9日）夜、胡鄂公は清朝皇帝が二十五日（2月12日）に退位を宣言し、袁世凱が総統に就任することを知り、北方の各革命団体の責任者を招集して会議を開き、“北方革命軍総司令部”の解散を宣布、各革命団体もその後、解散を宣告した。

### フランス帝国主義の老西開占領に反対する闘争<sup>22</sup>

フランスは天津で最も早く強制的に租界を設置した国の一つである。義和団運動の後、フランス帝国主義は、光緒二十九年（1903年）天津海関道の唐

紹儀に対し、老西開を強制占領するという不当な要求を提出した。老西開は海光寺窪地とも称し、北は墻子河から、南は八里台から佟楼までの4000畝余りの開拓窪地である。当時、清朝はこの不当な要求に答えなかった。その後、フランス帝国主義はカトリック教会を通して老西開で土地を強制買収し、教会を建て、学校を興し、この一帯の土地を併呑するための準備をした。1913年、フランス工部局は無断で老西開に巡捕を派遣し、既成事実を作ろうと企て、それを以て租界拡張の目的を達成しようとした。北洋政府は、フランス帝国主義のこのような我が国主権を侵犯する行為にまったく無関心で、ただ張庄大橋一帯に数名の警察を駐在させ、“抵抗したことにした”。

1915年9月1日、フランス工部局は老西開地区に告示を張り出し、中国人住民は“フランス租界”当局に納税するよう強制的に命じ、当地の住民の厳しい拒絶に遭った。9月17日、天津商務総会会長卞蔭昌ら335人が発起して“維持国権国土会”を成立させ、フランス帝国主義の拡張の野心に対して抵抗を行い、天津の社会世論は強力にこれを支持した。

1916年6月18日、フランス租界工部局は公然と老西開に木製の立て札を立て、大通りを修築する準備をした。当地の住民はただちに立て札を引き抜き、天津当局に報告し、迅速に制止の措置を取るよう要求した。10月20日、天津駐在フランス領事は派兵して中国警察の老西開駐屯地に闖入し、中国警察を武装解除して9人を捕らえ、武装して老西開を占領した。

老西開を侵略占領するフランスの強盗行為は、天津人民を激怒させた。10月21日朝、天津の各界民衆は北馬路の天津総商会の門前に集まり、“維持国権国土大会”を挙行し、フランス帝国主義の侵略罪行に強く抗議し、北洋政府に対し、全力で交渉し、“もし交渉の成果がなかったら、命を犠牲にしても対応する”よう要求した。大会の後、数百人が演説団を組織し、分かれて大通りから路地裏まで宣伝に行った。同時に隊列を組んでデモを行い、“フランス製品ボイコット！”、“為替銀行紙幣を使わない！”、“中国人警察の逮捕反対！”などのスローガンを叫び、省公署、省交渉署、省議会まで行き、請願を行なった。沿道の市民は先を争って参加し、デモの隊列が省公署に到着した時、すでに数千人に達していた。25日、南市で8000人の天津公民大会が開催され、フランスとの貿易を断絶し、フランスの侵略罪行に抗議する決議が全国に電報発信された。

10月28日、北洋政府外交部次長夏詒霆が天津に来て調査をいった。午後7時、彼は省公署にて省議会、維持国権国土会、公民大会代表と会見した。代表が



彼にこの案件にどのように交渉するのか尋ねた時、彼は言葉を濁して言った。

“出来るだけ対処するが、もしもできなかつたら、やらない他ない”。市民は彼の回答を知った後、憤怒極まった。29日、さらに1000人余りが参加する公民大会が開催され、大会の後、交渉署に集まり、交渉結果を回答するよう要求した。夏詒霆と交渉署委員の王元凱は、群集は“でたらめに騒いでいる”と面と向かって中傷したため、さらにいっそう公憤を激した。群集は一斉になだれ込み、この二人の官僚をひどく殴りつけ、夏と王は恐怖で顔面蒼白となり、その結果、一群の警備員と公務員の護衛の下、通用門から逃げ出し、その後、北洋政府は群集の圧力を汲んで、夏詒霆を免職せざるを得なかった。

11月12日から、フランス租界のフランス電灯房〔発電施設〕、贈答品会社などの中国籍労働者がストライキを始めた。ストライキの労働者はすぐにストライキ団を成立させ、団の下に文書、会計、接待、調査、庶務、査察、演説の七つの部を設け、並べて“注到处”を設立し、ストライキ労働者の闘争全体を指導した。ストライキ団の指導の下、各業種の運輸、清掃、調理、雇用などの労働者及び各洋行〔外国人経営の商社〕の中国籍職員もストライキの隊列に加入した。フランス租界の各学校の学生は授業をボイコットし、商人は閉店ストライキを行なった。中国人と商店も次々に“租界”から出て行った。11月17日、中国籍巡捕と消防隊員も勤務をボイコットし、フランス工部局を離れた。この時、フランス租界は一切の公共施設が停滞状態に陥り、水道水も電気も無く、臭気が鼻を突いた。夜に入ると、フランス租界は一面漆黒の“死の街<sup>23</sup>”となった。

フランス租界当局は電気供給の問題を解決するために、イギリス租界に支援を求め、一部の労働者を借用してフランスの電灯房で発電の手伝いをさせるよう要求した。イギリス租界の中国籍労働者は、もしもイギリス人がフランス人を援助するならば、我々は“フランス人に対するのと同様にこれに対する”ことを表明し、イギリス租界当局にフランス人の要求に応えることがないよう迫った。フランス人の家庭の保母のストライキのあと、あるフランス人は毎月40元の高給で買収しようとしたが、即座に厳しい言葉で拒絶された。

フランス帝国主義の老西開占領に反対する天津人民の闘争は、天津各階層人民の声援と物質的支持を得て、また全国の党、政、軍、工、商各階の呼応と支援をも得て、勢いはますます大きくなり、フランス帝国主義と北洋政府



は軽挙妄動できず、このこともその他の帝国主義の恐れと不安を引き起こした。最後に、中国駐在イギリス公使ジョーダン<sup>24</sup>が表に立ち、“老西開を中仏共同管理に置く”といういわゆる調停案を提出した。北洋政府は天津人民の威力を汲んで、領土主権を売りに出すこの条件の受け入れに応じる勇氣はなかった。

フランス帝国主義の老西開占領に反対する天津人民の闘争は、ブルジョア階級が指導するものであったが、労働者階級を主力軍とする反侵略闘争であった。天津フランス租界の各職業の労働者は半年もの間ストライキをやり続け、参加人数は1700人余りで、フランス帝国主義は公然たる老西開占領の企てを放棄せざるを得なかった。この闘争は、中国労働者階級誕生以来最大の、自発的な反帝反封建の政治闘争であった。それは大いに中国労働者階級の政治的覚醒と組織性、紀律性を表現しており、初めて労働者階級の偉大な力量をはっきりと示したものである。

#### 4 まとめ

以上、2～3章において『全書』中の記述を訳出したが、ここでは『天津史』『天津の近代』の内容を参照引用し、補足説明をしてみることにする。天津の義和団運動の背景について、『天津の近代』は次のような点を挙げている。第一、義和団の台頭は、旱魃に際して「祈雨の意義をもっていた」こと。

清代の地方官にとって、祈雨（雨乞い）は、仕事の一部であったといってもよからう。地方官自身が、どれほど祈雨の有効性を信じていたかはともかく、そのような儀礼が統治の必要から要請されていたとは言える。逆に言えば、天災が深刻な社会不安をもたらすこともありうる<sup>25</sup>。

『天津拳匪変乱紀事』より、官による祈雨の失敗と義和団の台頭についての記述が引用され、「祈雨のときに官が設ける壇と、義和団が拠点とした壇とには密接な連続性が存在し、義和団の擡頭は官に代わっての祈雨の意義を持っていたと考えられる。さらに言えば、官の祈雨のような慣行と民間信仰が重なる接点をもつような統治のありかたが、義和団の運動の前提として存在していたということである」としている<sup>26</sup>。

第二、義和団支配下の天津で、広東人、浙江人などの南方人が攻撃されたこと。

実のところ、このような南方人排斥は、ほぼ天津でのみ起こったことである。西洋に対する排外主義のように見えるものは、実は外省人に対する本地人の反感の表出だとすら解釈することもできる。先に指摘した、天津の多数住民による義和団支配の支持は、この南と北の矛盾にも由来していた可能性もある<sup>27</sup>。

第三、「天津における義和団の活動をめぐるいくつかの事象には、天津における過去の事件の記憶を念頭において人々が行動したと考えるべき点が多い」こと。1869年の「天津教案」の外国人排斥、鴉片戦争、太平天国軍の侵攻、第二次鴉片戦争などの天津防衛の先例が、「人々の念頭に上っていた」としている<sup>28</sup>。

袁世凱の巡警設置について。『天津の近代』は、「天津における巡警の創設は、全国的に見ても先駆となり模範となる意義を持っていた。」「巡警制度の拡大について言えば、この天津都市部の経験をもとに、農村部を含めた直隸全省へと普及が試みられ、また光緒三十一年（1905年）、中央官庁として巡警部が設けられてゆくという流れをみることができる」と述べている<sup>29</sup>。

周学熙の実業建設について。『天津史』では以下のように述べている。

周学熙とその一団は、日本を訪れて織物業の産地を視察し、帰国後はその熱のこもった報告にもとづき、日本から輸入した技術を駆使した模範工場や学校を設立した。日本人顧問も雇われ、技術者や職工が新しい産業の訓練施設を訪れたりもした。研修する学生は、直隸省全体から募集され、直隸工芸局で勉強にはげんだ。この工芸局は、日本から輸入した、足踏機や模様織りをするための紋織機（ジャカード織り機）を装置した新しい織機を普及させようとした。当初の計画は足踏機を全省に普及させる構想であったが、実際はいくつかの地域だけが新しい織布業の中心地となった。それらの新しい産業基地は、天津から一二〇キロメートル南西の高陽県、天津の真北の宝坻県、そして天津地区一帯である<sup>30</sup>。

1905年の愛国反米運動について、『天津の近代』は次のように述べている。

しかし、実のところ、ボイコットを熱心に宣伝したのは、民族資本家などではない。まずは、『大公報』などのジャーナリズムであり、『大公報』は全国各地の新聞から関係記事を採録している。学生や塾教師のような「学界」の人々のなかにも「愛国」の立場に立つものが少なくなかった。商人の中にもその感情を共有する人々は当然いたとみるべきであろう。そこでは「斉心」または「万衆一心」というような言葉で心情の一斉化による「国民」の一致団結が説かれた。天津商会側が「衆望」への配慮を示しているように、商人を含めた天津の人々のあいだに広範に反アメリカの感情がわきおこったことにこそ、運動の動因を求めるべきであろう。すべての商人がその感情を共有したと考える必要はないが、「衆望」を無視することはできなかったのである。とはいえ、国際貿易を担う商人にとって、ボイコットを徹底することも難しいため、市場の安定という議論が説得力をもつことになる<sup>31</sup>。

また、啓蒙の潮流の中で起こったボイコット運動は、上述の『時報』記事の主張によれば、「文明」の競争をなし、「文明」の排外をなすのであって、教会を焼かず、宣教師を殺さず、義和団のように「野蛮」の暴動、「野蛮」の排外を行なわないことが必要とされた。ボイコット運動は、義和団の記憶によって代表される民衆的暴力による民心の発露をおさえ、「文明」をもって「野蛮」に代えようとする時代思潮の現れであったともいえるのである<sup>32</sup>。

さらに、翻訳を通して気づいた点を挙げてみるならば、『全書』の歴史記述は、例えば、地理的な内容、人口統計、都市建設などの内容、あるいは外国列強、資本家階級などの内容が「8、天津歴史簡述」で述べられており、義和団、愛国反米運動、辛亥革命など、『全書』の編者が「人民解放運動」「革命闘争」と認識している内容が「9、天津人民の革命闘争」で述べられており、それぞれ系列化されていて、それぞれの括りの中では年代順に述べられているが、全体としてみると、歴史の流れの因果関係が分かりにくい記述となっている。

以上、『全書』の記述より、1916年までの内容を見てきた。引き続き、同

書の「五四運動」以降、新中国成立を経て、「文化大革命」終結に至るまでの内容を訳出し、その含む意味を整理、検討して、まとめたいと思う。

---

注

- 1 『全書』「前言」。
- 2 「8、天津歴史簡述」『全書』15～25頁。「9、天津人民的革命闘争」『全書』25～34頁。「10、天津的解放」『全書』34～35頁。「11、天津解放後の重大事件」『全書』35～42頁。
- 3 卷末の「主要参考書刊」にも挙げられている。『全書』808頁。「主要参考書刊」に挙げられているものは、ほかに「明史」「清史稿」「天津県志」「天津近代史」「天津簡史」「当代中国的天津」「天津通覧」「天津文化概況」「天津近代人物名録」「天津四十年」「『天津史志』季刊」がある。
- 4 『全書』「8、天津歴史簡述」22～23頁。
- 5 原文「北洋軍閥」。『全書』22頁。
- 6 原文「漢納根」。『全書』22頁。
- 7 「巡撫」は清代に各省の民生、軍政を取り締まっていた常設長官。
- 8 『簡史』では、清政府が練兵処を設け、慶親王奕劻を総理としたのは、「光緒二十九年（1903年）」となっている。『簡史』214頁。
- 9 原文「建立巡警」。『全書』22頁。
- 10 原文「試辦地方自治」。『全書』22頁。
- 11 原文「控制金融財政」。『全書』22頁。
- 12 原文「拳辦実業」。『全書』22頁。
- 13 原文「進行市政建設」。『全書』23頁。
- 14 原文「興辦教育」。『全書』23頁。
- 15 原文「租界的庇護」。『全書』23頁。
- 16 原文「義和団運動」。『全書』「9、天津人民的革命闘争」26-28頁。
- 17 原文「西摩爾」。『全書』27頁。
- 18 原文「阿力克賽耶夫」。『全書』27頁。
- 19 原文「1905年天津的愛国反美運動」。『全書』「9、天津人民的革命闘争」28頁。
- 20 原文「柔克義」。『全書』28頁。
- 21 原文「辛亥革命在天津」。『全書』「9、天津人民的革命闘争」28～29頁。
- 22 原文「反对法帝国主义強占老西開的闘争」。『全書』「9、天津人民的革命闘争」29～30頁。
- 23 「“死城”」。「都市としての機能が停止した街」の意。『全書』30頁。
- 24 原文「朱爾典」。『全書』30頁。
- 25 『天津の近代』133頁。
- 26 同上、136頁。
- 27 同上、143頁。
- 28 同上、150～151頁。
- 29 同上、158頁。
- 30 『天津史』35～36頁。
- 31 『天津の近代』270頁。
- 32 同上、272～273頁。